

本興寺だより

令和四年 四月
第三二号

「たとえば年の若い二十五歳の方が、百歳の髪が白く顔に皺（しわ）のある人を指して、この人は自分の子であると言ひ、子もまた二十五歳の人を我が父だと言う。父は若く、子は老いている。世の中にこんなことを信じる者はいないであろう。仏の説もそのように信じがたいものがある」（法華経 従地涌出品 第十五）
春の暖かさを感じる候となりました。

桜の花言葉の一つに「精神の美」があります。春の到来と共に開花する華やかさと美しさ、静かに潔（いさぎよ）く散る姿にも命の美しさと儂（なつ）さを感じます。

四月八日はお釈迦様のご降誕の日です。菩提樹の下で瞑想し、悟りを開かれましたが、どこまでも深く心の内面を見つめていく中で、全ての命も、この世の真理も、己が心底と深くつながり合っていることを悟られ、説かれています。

人の生き方も、草木や植物、自然界の生命からの学びが沢山あるはずなのです。春は植物の新芽が伸びてきて、正に命のスプリングを実感します。

植物の根が成長するのは、条件に恵まれた時ではないと言われます。毎日を与える草花は夏の日照りで

萎れても、雑草は青々と茂っています。雑草に水をやる人はいません。毎日がもらえる草花と雑草では根の張り方が違うのです。草木の力はみんな根にあります。人間の生き方も同じです。

「根性」「根気」「精根」など、根のつく言葉は生き方の根本を問う字が沢山あります。ちなみに「精根」とは活動力と気力、「精魂」とは魂です。人の実力も目に見えない根にあるのです。

根っこが十分に張らなければ幹や茎が簡単に傾いたり倒れたりします。人間も草花も。

私達も、辛い時こそ根が伸びるのです。

誰もが願う平穏無事な毎日ばかりであれば、根があろうがなかるうが問題になりません。



悲しみに耐える時、苦しみを乗り越える時、己の「根」が成長できることを教えています。

また温室で咲いた花は弱いと言われます。花材に使うと差がわかるということを知ることがあります。温室は太陽、水、土壌の管理が十分行き届いていますが、只一つ自然の風が当たらないということです。自然の風が当たらない植物は弱いのです。

人は日々ほとんど暖房や冷房の「人口の風」の中で生活しています。冬も夏も家の中も職場も車中も。身体に直接暑さや寒さの中に身を置く時間が少ないの

です。スイッチ一つで春でも秋でも同様です。

人生で受ける風は全て自然の風です。風もまた必要なのです。穏やかな暖かい風ばかりではありません。その中で冷たい風、熱い風、強い風で自分が吹き飛ばされそうになることもあります。他人から受ける風は自分にとって**試験の風**であり、**精根と精魂**を培う大切なものである、と知ることが大切だと云われます。
どんな時でも**精神（心）の清らかさと美しさを失わず**生きることが桜の花言葉は教えています。

一シーズンが終わっても翌年も草木が花を咲かせるように、人間の根↓魂も続いているのです。

日蓮聖人は、師匠の道善坊の墓前に「咲いた花は元の根に還り、果実の実は熟れて落ちた先の土に留まるように、この法華経の功德が亡き師匠の御霊に届くように」と、追善の言葉を述べられています。

日蓮聖人は、**仏様が説かれている過去、現在、未来と続く命をしっかりと知ることが大切**であると云われています。

従って現世は白紙で生まれてきた人は誰もいない。みんな深い業（過去世に積んできた善悪の行為）を持ち越して、この世でその罪障消滅を通して魂の浄化と向上の為に生まれてきているのだと教えています。人生はその過程であり、試験や苦悩が与えられているのだということです。



得できることです。

親も子も。何時か自分が逝った時、向こうの世界（彼岸）で出会い、心の対話を交わすことができるのです。ただ家族は無条件で皆逢えるわけではないのです。

家族でも個人の生き方、先祖への想いが違います。個人が作る善悪の業（魂のレベル）もそれぞれ違います。己の生き方を常に善に保ち、生者も死者（先祖）も共に今は姿が見えなくても一緒に生きているという感謝と供養の気持ちをお忘れしないで生きる時に、死後も再会できるのだと云われています。

仏様は教えは信じ難いこともあるが、一方では仏語に嘘や例えだけの話はないとも云われています。

合掌 本興寺住職 中谷 聰 秀